

入選 兵庫県 大城戸 聡子 様 (50代 女性)

年金と聞くと、ひとはまず老齢年金をイメージするだろう。それゆえ若い世代は、遠い未来のことだと考えて、保険料の支払いを渋る傾向にある。加えて支払保険料は高く、受給年齢はどんどん引き上げられ、支給額は引き下げられるとくればトリプルパンチ。年金未納者が増えるのもわからなくもない。

一般論として、動物と人間の違いは「火・道具・言葉を使えること」だという。しかし、一番の違いは「相互扶助」つまり「弱者と共生できる社会を形成できること」だと私は考える。動物の社会は、言わずと知れた弱肉強食。だが、我々は障がいがあったとしても、幼い子供を抱えているのにパートナーを失ったとしても、また突然両親を亡くしたとしても、国が制度として守ってくれるということは、意外と知られていない。自分の老齢年金額という目先のことばかりにこだわり、年金制度の大切な精神の「社会を構成する一員として、お互いを助け合う」という部分を見失ってはいないだろうか？

日本は申告主義なので、たとえ制度を使用できる該当者であっても、自ら届けねばそれを利用・享受することはできない。しかしながら、該当者の中には申告に必要な情報を得ることや、届け出るのに困難がある人たちもいる。このような人達を助けるためにも、子供の時から教育の現場で国の制度を、もっと詳しく教育する必要があると考える。「若さ」も「健康」も「命」も永遠には続かない。国民の権利や義務の授業を受ける教科の中に、もっと年金のことを盛り込み、1人1人が日本という国家を構成する国民の一員だという意識を高めてほしい。

人は皆誰もが、自分の未来は明るいものだと思って疑わない。逆に言えば、未来を信じて生きるのが人間だともいえるであろう。それゆえに自分の親が突然いなくなることも、自分自身が病気や事故で障がい者になるとも考えないし、まして障がいのある子の親になるとは想像もしないのが世間一般の普通の考えだ。ましてやうまくいっている結婚生活が予想外のことで中断するなど青天の霹靂。

だが、未来は不確定要素でいっぱいなのである。そして、どんな不幸に見舞われようとも、命が続く限りは生きていかねばならないのも事実。

だからこそ、自分を含めたこれからの世代への提言として、自分が老齢年金を晴れて受け取れる時が来たら、その時は健康でここまで生きてこられたから「おかげさま」。受給額が予想と違っていても、それは誰かのために役立てられたから「おたがいさま」。これが同じ時代の日本に生きる国民同士の「おもいやり」。

この3つの「お」を胸に秘め、美德を持ち備えた日本人が増えていくことを望んでやまない。